

## 「伝えたいこの気持ち♥手紙を書く」

みなさん、今は友達への連絡にもLINEやメールで簡単に済ませる人がほとんどでしょう。手間も省け時間の短縮にもなりますが、感情の见えない機械的な文章からは本当の心は見えません。「文字をつかって書くことは、目の前にいない人を、じぶんにとってなくてはならぬ存在に変えてゆくこと」とは、長田弘（詩人）の言葉。相手を思いながら言葉を選び、宛名を書いて封をし、投函されて相手に届く手紙には心があります。（原真由美）



森見登美彦『恋文の技術』ポプラ社 2009

「無駄になったラブレターの数だけ人は成長する」とは主人公の守田。彼が友人や先輩に送りつけた手紙の数々。特に、片思い中の彼女に宛てた恋文は赤面ものですが、反省を活かして書き直された手紙を読むと「やればできるじゃないか、守田君!」と思うのです。恋は人を愚かにし、恋文はその愚かさの記録なのです。

梯久美子『世紀のラブレター』新潮新書 2008

明治から平成にかけて、作家、政治家、俳優らによって書かれたラブレターの数々を紹介。戦時中、恋文はそのまま遺書になりました。遺された人にとってそれは形見となり心の拠り所となったのです。様々な人たちが一文字ずつ刻んだ文字の力を感じてください。



須賀敦子『須賀敦子の手紙』つるとはな 2016

56歳で作家としてデビュー、69歳で惜しまれて世を去った須賀敦子。晩年心を許した友人に宛てた手紙の数々を、万年筆の青いインクの筆跡が忠実なカラー写真で紹介。便せんの上に流れる文字は人柄そのもの、常に書く人であったことが感じられます。



### 〈伝えてね、この思い〉

長田弘『すべて君に宛てた手紙』晶文社 2001

金菱清『悲愛 あの日のあなたへ手紙をつづる』新曜社 2017

タミ・シエム・トヴ『父さんの手紙はぜんぶおぼえた』岩波書店 2014

### 〈早速書いてみる?〉

森まゆみ『かしこ一葉』筑摩書房 1996

池田書店『手紙の書き出しと結び文例集』池田書店 2014

清水あかね『おり手紙 折って渡せる33の手紙』飛鳥新社 2013



### 〈絵本はいかが?〉

瀬田貞二『きょうはなんのひ?』福音館書店 1979

中川李枝子ほか『こんにちはおてがみです』福音館書店 2008

安野光雅『おとぎの国の郵便切手』岩崎書店 2000